

## 鮎川信夫の詩と死

韓国外国語大学校 徐載坤(スゼコン)

### 一 はじめに

日本現代の代表的詩人であり、戦後の日本詩壇をリードしてきた鮎川の詩的基層を(死)をキーワードに通覧する。

#### ★簡単な年譜

- 1937年、早稲田第一高等学院に入学、『若草』などに詩の投稿を始める  
中桐雅夫の呼かけに応じて当時の若い詩人たちの拠点であった『LUNA』に参加。同人に森川義信、田村隆一、北村太郎、三好豊一郎  
1938年3月、モダニズム詩雑誌『詩と詩論』の後継誌で、村野四郎、近藤東、上田保らが編集していた『新領土』に参加  
11月、早稲田大学文学部予科の仲間たちと同人誌発行の計画を立て、翌年3月、第1次『荒地』を創刊  
1942年、早稲田大学英文科を中退して入隊  
1943年3月、三好豊一郎編集の詩誌『故園』へ遺書のつもりで書いた「橋上の人」を書き残し、同年5月、スマトラ島に出征  
マラリアや結核を発症し、1944年5月に傷病者として帰還  
敗戦後の1947年9月、田村隆一らと第2次『荒地』を創刊  
1951年8月、『荒地詩集1951』刊行

#### ★日常生活の中の死

戦争の犠牲、政治的背信、失業問題、そしてその他一切の暗澹たる社会的環境、――僕たちの暗さは、これらの現像の背後から突如として生じたわけではない。多くの人々が経験してきた苦悩と憂鬱が、僕たちの意識から離れぬかぎり、何事も解決されたことにはならぬのである。このあたらしい血と涙の時代に於ける救ひは、人間の目的、価値、條伴の基準が変らぬ限り、やすやすと訪れはしない。／僕たちの日常生活の中に忍び込んである死の観念は、僕たちの過去の経験のなから生き残ってきた影である。

(「詩人の條件1」『詩学』1949・12)

## ★死への親しみ

詩のレベルで言うと、戦後のはじめからこの「死んだ男」でも「姉さんごめんよ」でもそうですが、死ということにかんじてひじょうに親しい情熱があったように思える

(北川透「討議 認識者の生と死」『特装版 現代詩読本 鮎川信夫』)

## 二. 死の日常化と死への馴致

・鮎川の生は「戦争」というものと引き離せない。吉本の説明を借りれば、「戦前の下降期文化」「戦争体験」「戦後社会」の日本社会の変遷にしたがって、少年期、青年期、壮年期を送った。1920年生れである鮎川としては、「満州事変」(1931・9)、「支那事変」(1937・7)、「真珠湾攻撃」(1941・12・8)から始まった太平洋戦争、そして敗戦。といういわゆる「15年戦争」(アジア侵略・太平洋植民地争奪戦争)の最中で青年期を過ごした。戦争という集団狂気に向かって猛進する社会状況の中で、だんだん日常化してくる「死」を詩の中に反映させざるえなかったであろう。

・戦前の活動の主な舞台は、『LE BAL』(後に『詩集』に改題)、『荒地』、『新領土』

## ★『LE BAL』

・「室内」(1938・11)

窓は明るい海の水で／室内を青く洗ってゐる／花は眼のある動物を見ない／傾いた机は風を聴くことがない／錆びたピンで留められ／海図の脈のどこかに消えてしまった／やさしい葦よ／透明なる緑よ／誰も小さな寶石筐と／舶来煙草のことを知らない／石の床に新聞が配達されてゐたことも／樹の影を掠めたのは／昨年の唄であろうかもう見えない／貝殻の匂のする帽子は／鏡のなかで眠ってゐる／眠ってゐないのは時計であり／十二時を打っても／椅子は空虚なままに／死んだものは壁の中に／白い砂漠の上に住んでゐる

・管見した発表作の中で、最初に「死」が登場。

・潮水の匂いが漂ってくる海辺の近くにあるような部屋の室内風景は、超現実主義的なレトリックによって描写されている。

ある身体特徴(眼)を持つている動物を見ない「はな」

傾いて「風」の音を聴かない「机」

鏡の中で眠っている「帽子」

空虚な「椅子」

このような一風変わったものばかりが置かれている室内雰囲気

・見ない、聴かない、消える、知らない、見えない、眠っていない、死ぬなど、否定の表現が目立つ。それは「昨年」という時間軸とも無縁ではない。つまり、詩の前半の描写は過去のことの再現であるゆえに、はつきりしない。「時計」が時間の経過を知らせるが、その心象風景はまだ記憶の中で「眠ってゐる」、いわゆる「死んだ」状態で「壁の中」から一向も出てこない。

・鮎川信夫詩における内部空間の閉鎖性(宮崎真素美『鮎川信夫研究』)

(日本図書センター、2002)

閉塞的な室内は、常に室外との対比を迫られ、室外は時に驚異として荒廃した町並みとして、また、静寂としてその存在を示し続け、対する室内には虚無的な静寂から破壊へ、そして破壊の後の懶惰な静寂へとというストーリーを見出すことができる。ここで特徴的なのは、室内に生み出される様々な人称であり、へおれへ、へぼくへ、へわたしへ、へおまへへ、へあなたへ等々、多様に分化されてゆく。自己韜晦的な様相を示すこれら人称の分化は、多くの自己を刻みつけ、自我のありかを眩ませることで、それを守り続けようとしているかのようなのである。室外と室内の対比に、それぞれ時代の外圧と、それに抗し続ける自己の内景とが託されているであろうことはわかりやすい。

「室外」の「荒廃した町並み」というのは、まさに「荒地」のイメージそのものであり、戦争という「時代の外圧」のせいで、室内に「閉鎖」されている「自我」の「自己韜晦的な様相」を多様な人称の分化という形で表出せざるえなかった。室内と室外の対比という構図を通じて、「時代の外圧」と「自己の内景」の対立構図を形象化した。

### ★『荒地』

詩「室内」が発表された同じ月、早稲田大学文学部予科の仲間と同人誌発行の計画を立て、何回かの会合を重ね、同人詩名を「荒地」に決める。「荒地」というタイトルはエリオットの詩集名から取ったものであることは周知のことである。

### ・「唄」(『荒地』第1号、1939・3)

ハツカを唾へて澄んだ煙をふかしてゐた／青い樹の下は／K氏の公園のプウルに近く／螺旋の風は／金いろの羽毛を日に光らせた／若年の日に／木製のパイプ／木製のベンチ／木製のポニイの／賢明な若い主君は／花が浮んで噴水をかむった／麦藁帽子ほどのプウルをまはり／ポニイに乗って／青いブヌウマチックのやうに／逃げてゆく太陽を追った／たそがれの道に迷へばパイプで／海より深い空を燃やし／ぼくはベンチに凭れて／夢見つつ死んでしまった／いくつかの樹も枯れ／若年の記憶は古くなり／とほく離れて文字を愛して／アスファルトで新しく誕生し／若年のコイルを閉ぢてしまったが／室内のガラスを濡らす／白い雲の中で眼をつぶり／ドアを叩けば／円形の窓のない世界から／溢れてくる影のどこかで／ぼくの耳は響いてゐる

「ぼくの死」を境に「若年」に関することの変化

- ・ 1937・7 日中戦争
- 1938・5 国家総動員法
- 10・26 「戦争詩の夕べ」
- 1939・7 国民徴用令
- 9 第2次世界大戦

・ エリオット「荒地」の「死者の埋葬」（『荒地』第2号、1939・5）

資料 ①

★『新領土』

樹には吊された肉体がある／死の影が拡大される／不毛の地図には／白亜の建築が聳え立ち／祈りのない叫び声と／歯のない哄笑とが／不断に闘つてゐるときに／不思議な糸車は／眩きのやうに廻つてゐる／爽やかな朝に墓場の鍵が配られたとき／蒼ざめた肉体は／欲望に乾いた皮膚を脱いで／梯子を登るのである（未完）

（「非望の自転」『新領土』1939・4）

壊れた船体のやうに／わたしは愚かしい知識の墓場を／蝙蝠傘とともにさ迷ひ／おびただしい植物のまへで立止まると／樹液の触手は／わたしの体を石のやうに氷らせた

（「魅入られた街」、『新領土』1939・6）

一本の花の茎もない空の下に／地域は張りめぐらされた棘で囲まれ／緑の影はいつもガラス管によりそつてゐた純粋な頭の鈍い速度について／浴槽の中で思考したのは誰であったか／（中略）／ねじられた鎖のやうな数輛の列車の合図が響き／地下に住んでゐる声を踏みしめ／おびただしい製品とともに／暗闇の市場へと運ばれてゆく武器たち／それは植民地のためではない／（中略）／ただそこに時代の速度乃至歩調が見えてくるだらう／一台の列車が到着するであらう／乗つてゐる何に乗つてゐる何が／わたしたちが所有するすべての宝よ／そこに一個の文明が／そこに一個の社会が工場が／そこに一個の希望が絶望が信仰が／そこに多数の生活が個人によつて支持される

（「雑音の形態」『新領土』1939・10）

奪ふものを／奪はれて／わたしの骨は涸れてゆき／しだいに眼をとじた楕円の石に変わつてしまふ／（中略）／さうだ雨の降る日に／死者をして死者を葬らしめよ／永遠よりみじかい時間のうちに／柱も扉も腐食してゆく／（中略）／白い墳墓の方へ／落ちていった星を何と呼ぶのだらう／（中略）／死の谷間が深いやうに／月は遙かなる湖にか／（中略）／いくたびか流された血は／もはやこの身にもどらない

（「泉の変貌」、『詩集』1940・9）

あなたは遠く行かうとした／海よそして人気がない墓場がある／地の果よそし

て濁らない泉がある／青春よ もう再び戻ってきてはいけない／(中略)／また明日お会いませう もしも明日があるのなら／あなたは誰かに向かつてさう言った／みんなは黙った眼を閉ぢ眼を開き膝をみつめて／あなたは走ってゆくだろう／街角をまがり窓をとりぬけて／別のあなたが／やはり濡れて陸橋に佇んでゐることを思ひ／別のあなたの藻のことを考へながら

〔「圍繞地」第1連と第2連の一部、『新領土』1941・3〕

「死の影が拡大される」につれ、「墓場の鍵が配られ」る状況の中で、「わたし」は「愚かしい知識の墓場を」さ迷う。しかし、まもなくそのような生活に別れを告げる時がやってくる。仲間と別れ、遠いところへ「地の果て」、つまり戦場へ、それぞれが向かう。そのとき、彼の頭の中には、いづれか「骨は溷れてゆき／しだいに眼をとじた楯の石に変わって」ゆき、「雨の降る日に／死者」として葬られるわが身のことが浮かんできただろう。

吉本は詩「圍繞地」の「もしも明日があるのなら」という表現に注目し、「鮎川さんの詩をかかえる場合に一種のキーワード」であり、「鮎川さんの戦争を通過して戦後にいたるまでの詩の感性的な基礎が、この「圍繞地」を前後する作品でたぶん形成されたとかんがえる」と言っている。死が日常化しつつある状況の中で、死とどう向き合うか、というのが一番の課題であった。

・「戦争詩に關聯して」(『新領土』1939・9) ∴「戦争詩」という新ジャンル

⇨資料 ②

拙稿 「「荒地」派と戦争—戦後詩研究のためのエスキス—」(『四季派学会論集』第十六集(2011・12)参照されたし。

文章の冒頭で、鮎川は「戦争詩」をめぐる論議について言及している。「一時はとやかく頻りにうるさく論議」されていたが、何の結論も見いだせないまま、論議自体が下火になっている。それより、いくら論議を重ねても、「肝心の戦争詩にすこしも傑れた作品が現れない」現状の分析から始まっている。今現在に「戦争といふ時代的な現実の変革期」を迎えているが、これは「もつと普遍的な重要な問題の限界内」のことであるから、「詩の時代性とか社会性」について真剣に検討すべき機会であると受け止めている。

次に「詩の新しい価値」の発見は、「時代の力とか社会的なものの影響」とか、「他の文化部分との接触とか交流」による場合と、「詩自身の領域内」で「あらゆる可能性の実験から新しい独自の機能を追求することによって組織された理論」による場合がある。前者は「全体的な心理の中に発生する思想的なもの」が多く、「生活上の変化、時代の推移などの現実の変遷に即して、問題が提示される」。そして、戦争が投げかけた波紋が大きいほど、こちらの方が「頓に活発になるのは必然の理」ではある。しかし、大事なものは詩としての「方法」であると強調している。「それらが方法を全然無視して行われる場合は、詩の芸術的価値を忘れた滑稽なトリビアリズムに墮する恐」がある。「方法に対する認識の確さを欠いたため、結局に於いて一面的な国策詩を宣揚することだけに終わってしまったのは遺憾」で、「少数の詩を除いた他は、退屈な平凡な感激の吐露」に終わったと批判している。そして、「精神の脆弱な笑ひや軽蔑にサタイアを遊ばせてゐる時代」は過ぎたので、「すべてを正確に凝視する眼」を養うべきであるという提言で文章を終わらせている。

これからの戦争と詩、詩人との関係がだんだん密接になってくるはずだが、詩(詩人)としての「方法」に関する自覚をすっかり持っていないと、「退屈な平凡な感激の吐露」という「滑稽なトリビアリズム」に陥り、芸術的価値が失われた「国策詩」になってしまうというのが鮎川の論旨であろう。

### 三．死者の代行者としての戦後

#### ★戦争体験の内面化

・吉本隆明『鮎川信夫論』（思潮社、1982）

たれも、鮎川のように戦争体験を内面化しようとしたものはいない。重たい主題を、やくざな根性で追いまわし、やがてけろりと忘れる詩人は、あとをたたないが、あの無名の大戦の体験を十年ちかくのあいだ、にぎりしめ、反すうしようとする苦渋な詩人は、鮎川の外にはいない

・野村喜和夫『討議 戦後詩―詩のルネサンスへ』（思潮社、1997）

その後の鮎川信夫のすべてが、この戦争体験に発し、あるいはたえずそれに立ちかえるのである。この詩人にとって、戦争はたんなる告発すべき対象ではない。自身が傷病兵として帰還し生き延びてしまったことのおかげに、とりわけ、親友だった詩人森川義信の戦死をひとつの大きな詩的モチーフとすることによって、そこに一回的で還元不可能な体験の強度を与え、そうして決然と、ある絶対的な特異性の刻印のもとに――反復しえないものの反復という詩作行為の本質において――詩を立ち上げさせた

戦後、鮎川が最初に発表した作品は「耐えがたい二重」（『新詩派』1946・7）である。

深夜 唇が煙草を挟んでいる／とだされた部屋に心臓の羽搏きが／左右に拡げる黒い蔭！ 二重のドア／孤独な生きもののため／耳をすましている中枢に／つかれた椅子の軋る音……／重たい時計の振子の音……／頭上で屋根を剥ぐ不気味な爪の音……／頬骨がつかめたい空気のなかで尖ってくる／不図した思考が／うなだれた水仙の賢しげな影を卓布に落す／鏡がひややかに自虐を睨む／私は怖れる／古風な銀の縁をつけていつもこの水が動かぬことを……／自己愛が底深く凍りついてしまっていることを……／大きく見ひらいたうつろな眼の／おとろえた視力の闇をとおして／朧ろに姿を現わすこの髭だらけの死者は誰だろう

この詩は前節で引用した詩「室内」と大変似ている。煙草、部屋、椅子、時計、鏡。これらに詩語は詩「室内」でも使われていたし、「死者」「死んだもの」というのも同じである。詩語の共通性だけでなく、「孤独な生きもの」が「二重のドア」によって「とざされた部屋」にいるという、閉塞状況までも一致している。

詩「囲繞地」の「また明日 お会いませう もしも明日があるのなら」というフレーズは再会の誓ではなく辞世の句であったはずだった。また会える明日なんかは決して来ないことを知っていたうえで別の言葉であった。が、予測に反して、その「明日」が来てしまい、そして「私」が「怖れる」こと、「大きく見ひらいたうつろな眼の／おとろえた視力の闇をとおして／朧ろに姿を現わす」「髭だらけの死者」との深夜の遭遇が行われる。

戦争で死んだMよ／高いところに建って影の眼を開いてみたまへ！／私たちの間には 広い荒涼たる眺めが、／黒い足のやうに縮まってゐる 君の黒い足のやうに――／そして落陽はただひとつ。 (『日の暮』『純粹詩』1946・12)

たとえば霧や／あらゆる階段の聲音のなかから、／遺言執行人が、ぼんやりと姿を現す。――これがすべての始まりである。／(中略)／Mよ、昨日のひややかな青空が／剃刀の刃にいつまでも残っているね。／だがぼくは、何時何処で／きみを見失ったのか忘れてしまったよ。／(中略)／埋葬の日は、言葉もなく／立会う者もなかった、／憤激も、悲哀も、不平の柔弱な椅子もなかった、／空にむかって眼をあげ／君にはただ重たい靴の中に足をつつ込んで静かに横たわったのだ。／(中略)／Mよ、地下に眠るMよ、／きみの胸の痛みは今でもまだ痛むか。

(『死んだ男』『純粹詩』1947・1)

「戦争で死んだM」と死にそこなった「ぼく」との間に横たわっている「広い荒涼たる眺め」。それこそいくら「縮まって」も乗り越えられない生と死の境目であろう。詩「耐えがたい二重」の「大きく見ひらいたうつろな眼の／おとろえた視力の闇をとおして／朧ろに姿を」現した「髭だらけの死者」が「戦争で死んだM」であることに気づいた瞬間、その死者と入れ替わって「遺言執行人」としての「ぼく」が「ぼんやりと姿を現す」のである。この「M」が親友である森川義信という「あくまでも固有の人間でありながら、戦争による死者たちの象徴」であるのはいうまでもない。

宮崎は

「絶えがたい二重」の最後に示された「髭だらけの死者」の映像は引き継がれ、ここで「遺言執行人」として名指しされた存在となった。詩篇に示される「死にそこない」としての自己定位は以降の詩篇でも繰り返されることになる。死んでいたはずの自分と、現実には生者としての肉体を有する自分との間で引き裂かれる二重性は、彼に、精神的な死者としての眼を選択させ、死者たちの遺言執行人として自らを位置付け、生かしてゆく方途を発見させた。死者に寄り添い、死者として生きることを自らに命じたのである。その意味において「死んだ男」は、戦死者たちへのレクイエムと復活とを内包し、また、戦後を生きる自己の役割を宣言した詩篇

であると解釈している。

## ・死者の代行者

死者を呼び合っているということは、死者を代行している、ということになりかねない。そうすると代行は表象としての芸術行為というか、リプレゼンテーションの問題というか、ポストモダンを経た現在では不粹ともいえる非常に近代的な行為だったということになってしまうと思うんですね。(野村喜和夫、『討議 戦後詩』)

#### 四．「死の衝動（本能）」の表象としての詩

北村太郎は、ある座談会で次のように証言している。

あの人はフロイトはあまり信用してないところがあつたんですよ。だけど唯一、フロイトが見つけた「死の本能」というのだけは、あれは不思議なアイデアだとよく言っていましたね。（中略）あの人は詩のスタイルや製作の上ではモダニストみたいなところは最後まであつた人ですけれど、人間の生死や肉体についていえばナチユラリストだったと思うんです。ただ詩の中やたまにもらす感想の上で死と親しい感覚や印象というのはあるでしょうね。（下線 徐）

「死の本能」：ドイツ語の「Todestrieb」の翻訳語で、最近「死の衝動」と訳されたりもする。

フロイトの精神分析用語で死へ向かおうとする衝動のことで、死の神であるタナトスの神話から由来している。死にたい気持ちに駆られる

フロイトが最初に「死の欲動（本能）」という語を用いたのは『快樂原則の彼岸』（1920）で、人間の無意識の中に自己破壊・自己処罰的傾向が存在していることを発見した。神経症の強迫観念、第一次世界大戦帰還兵たちのフラッシュバック（Flashback）現象、少女の「いない・遊びに見られる母の不在の反復などが、「死の欲動」に属する。その中で、帰還兵たちのフラッシュバック現象は心的外傷とよばれるトラウマが主因であると言われている。トラウマには事故や災害などによる急性のものと、繰り返し加害、たとえば虐待などによる慢性的なものがある。さらに、洪水、火事のような自然災害によるものと、戦争、監禁、虐待、強姦のような人災によつて生じることもある。特に、戦争によるトラウマが引き起こす症状としてはPTSD（心的外傷後ストレス障害）と戦争（戦闘）神経症が代表的である。戦争体験が何らかの形で心身の障害をもたらしたり、フラッシュバックといつて過去の出来事がはつきりと思ひ出されたりする。だから、鮎川が「戦争で死んだM」のことを繰り返し書き続けるのは、一種の「フラッシュバック」であり、「死」をテーマにした詩を創り続けるのは「死の衝動」のデフォルメにほかならない。

#### ・1950年代の「病院船日誌」連作

虹彩から光が消えうせ／ぼんやりとデ・マスクが肉眼に見えてくる。

（「病院船室」『ゆうとぴあ』1947・3）

生きるためより／死ぬために／ぼくらは水平線をこえなければならぬ

（「消えてゆく水平線」『詩字』1953・6）

浅い湾口には／墓標のように番号をつけた煙突がならび／その下におびただしい輸送船が沈んでいた／ぼくらは白衣の亡霊となつて／静かに風いだ墓地の上を／音もなく歩いていった

（「海上の墓」『詩と詩論』1953・7）

カミソリ自殺をとげた若い軍属の／白布につつまれた屍体が／ゆらゆらとハッチから担ぎ出されてゆく／(中略)／多くの友が死に／さらに多くの友が死んでゆくとき

(「サイゴンにて」『詩と詩論』1953・7)

この不幸な兵士は／悪魔の手におちるかもしれない／いつか何処かで／死のうと思えに／もう二度とめぐりあうこともない

(「遙かなるブイ」『詩と詩論』1953・7)

死んだ兵士を生きかえらせることは／金の縁とりをした本のなかで／神の復活に出会うよりもたやすい／多くの兵士は／いくたびか死に／いくたびか生きかえってきた

(「神の兵士」『詩と詩論』1953・7)

ぼくらはすでにこの歴史の中では死んだ者／夜あけのくる船窓の下の／木の吊床に横たわる者

(「港外」『詩と詩論』1953・7)

## ・1970年代の終焉の到来

### 1. 母の死

生きていくことに怖れを感じていた幼年時代だったら／若くて死に憧れていた母が一緒に死のうと言えば／ぼくは黙ってうなずいたのである／生きることより死を受入れるほうがずっとたやすかつたろう／／生きることに困難を覚えていた青年時代だったら／一瞬の激情で死に突入していたかもしれない／世をも人も厭いつつ生きていて／死と生が秤のうえでゆれながら均合っていた

(「死について」『短歌』1976・6)

詩「秋のオード」でも取り扱われている。

### 2. 戦友の死

同年兵で幹候の試験に合格した組は、／硫黄島に送られ、全員戦死していたことをはじめて知らされた。／(中略)／どのようにして戦後社会をたたかいてきたかを語りあったが、

(「消息」『文芸展望』1976・7)

二十人ほどいた仲間のうちで、現在、／文学の世界にとどまっている者は、わたししかない。／(中略)／半数近くは戦争で死に、／敗戦直後の苦しい生活のたたかいに敗れて倒れた者もあった。

(「私信」『現代詩手帳』1976・8)

戦争と革命の犠牲者たちの／死屍累々の谷が見えがくれするので／(中略)／おま

えはうやうやしく何を葬ってきたのか

〔「廢屋にて」『海』 1979・5〕

### 3. 時代の死

頭蓋骨を射ちぬかれて死ぬ一人の男／林立する墓石の女／それで近代の伝説は消え象徴は解体する／(中略)／だがみよヒットラーは死んだんだ／ムツソリーニも死んだ／スターリンも死んだ／毛沢東も死んだ／(中略)／はてさて **七十年代も終りですか**／(中略)／いびきをかいて死んでいきながら／死を知らない何で素敵ではないか／「ねたらくじょうど／どうかこのまま眼が覚めませぬように」

〔「独白」『文芸』 1980・2〕

ジョン・レノンが射たれて死んだ、と／ラジオ・ニュースが伝えたとき／アナウンサーの声は平静で／何のコメントもなかったが／一瞬、あたりが真白になった

〔「ジョン・レノンの死に」『日本経済新聞』 1980・12・28〕

吉本は、鮎川の詩に「死」がつきまわっていることについて、

このような、現実的な関心の強い鮎川作品をくまどっている死の観念は、いわば、戦前の自我形成期における日本資本主義文化の運命をひきずった死であり、僕らの行手は暗いという意識のままに生死もわからぬ戦場にたたねばならなかった戦争体験をふまえた死であり、また「戦争の犠牲、政治的背信、失業問題そしてその一切の暗澹たる社会環境」(幻滅について)を感受し、それを無意味な時代がしずかに腐敗してゆくとかんがえずにはおられなかった戦後の、現実をふまえた死であった

と説明している。

つまり、「死」というテーマには戦前、戦中、そして戦後の日本の「暗澹たる社会環境」が凝縮されているからであろう。しかし、鮎川が「死」というアポリアにこだわりつづけたのは、このような対社会的側面だけでなく、それが人間という存在の本質、及び文化というものの本質と深く結び付いていると考えていたからである。

一人の人間の内部に精神と肉体が相尅し、もつれ合ひ、妥協しあつたりする刻々の自我の動きの中には、人間の宿命的な深淵が覗かれるのである。「自分は一体なんであらう」といふ疑ひもそこから生ずる。しかしかうした疑ひは、死への誘ひであり、形而上学的蠱惑の世界へ通ずる多くの道の一つである。

〔日記、1941・8・19〕

人間は死というものをどのよう<sup>に</sup>考えてきたか。宗教を異にし、国家を異にし、そして時代を異にすることによって、そこには幾つかの違った類型が考えられる。(中略)そしてそれらによって弔られることによって、死者は民族的伝統のうちに生きるものとなる、と考えられてきた。そして過去の文化は、それらの死の上に築かれていったのである。

(中略)本質的な意味では、文化は死の上に築かれることに間違いはない。つまり人間の意識を不死なる文化につなぐものは、人間の個体の死という事実にはかなら

ない。(「現代詩とは何か V詩と伝統」『荒地詩集1951』)

「自分は一体なんであらう」という根元的問いは「死への誘ひ」につながるし、日本人は仏教、天皇制、儒教、武士道、愛国心という「民族的伝統」によつて「死の恐怖」から逃れてきた。だから、「文化」は「人間の個体の死」の上に築かれることであると見ている。鮎川にとつて「死」というテーマは個人の実存のレベルだけでなく、その「個人の死の集合体としての文化」という属性まで持ち合わせているのである。そして、それをモノローグしようとするとき、一番有効な詩的戦略が「死の衝動」による戦争体験の言説化、つまり、あの時へのフラッシュバックであつたにちがいない。

### ★時代への殉教者として「われわれ」

・「殉教」(『現代詩手帳』1981・4)

天気はいいが／ぜいたくな心は重い／壁面の王は／目尻に涙をにじませ／ひそかに欠伸をかみころし／そこまでは静止した風景だつた／(中略)／信念よりは自身が大事だから／われわれは死なぬ／けれども昨日まできみを／生かしてきたものゆえに／きみ自身は死ぬだろ／う／粗殻をとばす篩にかけられて／準備はすべてとのいながら／別れを告げる違もなく／この世から立去る／くり返しの多いきみの歌が／まもなく死ぬ／何に対する敬礼か／ふかぶかと頭をさげた／きみの影がみるみるちぢんで／甘い香りのように地に融けていく／森は動いて／王城はゆらぐかとみえ／なおかすかに雲間にあつた

## 五. 第2次『荒地』に関する謎

### ★第2次『荒地』のアイデンティティーはあつたのか。

『純粹詩』18号(1947年8月)の裏表紙の広告

⇨ 資料 ③

第1輯には、北園克衛の「non figuratifの芸術」が、第2輯には、安藤一郎の「危険人物」という評論が載る予定であつた。

### ★幻の『荒地』第7集

『ピオネ(PIONEER)』第3輯(1948年6月)の『荒地』第7集の刊行広告

⇨ 資料 ④

しつかり掘んでゐるその根は何か。この石地から生れるものは何か。人の子よ、汝は言ふことも、推測することも出来ぬ。汝は碎かれた影像の一團しか知らないのでから。そこに日は照りつけ、枯木は、息ひの陰を、蟋蟀は、なぐさめを、乾いた石は水のひびきを與へぬ。此の赤石の下には陰があるだけ。

T・S・エリオット

—「荒地」死人の埋葬より

②

戦争詩に關聯して

最近議論が少なくなつたといふ譯をきく。論ずる問題が無くなつたわけではないのだから詩人が怠惰になつたといふに外ならない。戦争詩についても一時はとやかく頼りにするさう論議せられたものなのに、どういふ結論にも達しない中にいつの間にか殆んど立消されたかたちになつてしまつた。もつともいくらか議論しても、肝心の戦争詩にすこしも傑出した作品が現れないのでは仕方がない。

戦争といふ時代的な現實の變革期に直面して、詩が戦争といふ現象の事實からに限らず、それより發端したつと普遍的な重要な問題の限界内に、知性の大きな衝動と質的的成果をも

たらすべき好機會が與へられたのであるから、それ相當の眞摯な態度で、詩の時代性とか社會性を検討すべきであつたらう。

鮎川信夫

時代の力とか社會的なものの影響の下に於いて詩が促進され發展の方向が見出され、或ひは他の文化部門との接觸とか交流によつて、詩の新しい價值が發見される場合もある一方、詩自身の領域内に於いて、そのあらゆる可能性の實驗から新しい独自の機能を追求することによつて組織された理論を根據として進化する場合とがある。

勿論實際に於いては、これらが極端に對立する場合も少なく、適當に混和されてゐるのであるが、前者側は概ね全體的な心理

の中に發生する思想的なものが多く必然的に重視されてくる傾向にあるが、後者は藝術上の優れた一個の才能によつて見出され支持されるに至る形式上の進化を意味する場合が多い。

前者にあつては、生活上の變化、時代の推移などの現實の變遷に即して、問題が提示される。そしてこれらの範例は大てい歴史の中に残されてゐるのである。故に多くは嘗て論ぜられた問題が、時に應じて繰り返され新しい装ひで提示され、論ぜられるのである。

戦争のな付かけた波紋が大きければ、前者が頗る活潑になるのは必然の理と云はねばならぬ。しかし、それが方法を全然無視して行はれる場合は、詩の藝術的價値を忘れた滑稽なトリビアリズムに墮する恐がある。ところが多くの論者たちもこれの方法に對する認識の確さを缺いたため、結局に於いて一面的な國策詩を宣揚することだけ

に終つてしまつたのは遺憾であつた。それがため少數の詩を除いた外は、呆屈な平凡な感傷の吐露に終り、不幸な讀者を吐けさせた。貧しい寒くなるやうなそれらの詩より、記録として最も進んだ且完備せるものと思はれるユートズ映畫を通して陳腐な方が、どれだけ強い感銘を與へられるか知れない。

これは導くべき理論の方向を誤つたためであつて、評論家の知性の貧困と冷静さの缺如に起因する。戦争と詩についての意見は、殆んど古い詩人連が法接しに論じ、新しい詩人は、あまりこれに加はらなかつた。これはどちらにとつても不幸であつた。精神の脆弱な文壇の態度にキタヤアを遺言させたこの時代はとうに過ぎである。このやうした戰爭國策から出て、詩が何を使命に擔負するべきかは、新しい思想

# 荒地

第7集

## 評論

文明批評家と詩人……黒田 三郎  
基督癡刑罰……三好豊一郎  
幻影の時代……木原 孝一  
パスカルをめぐりて……梅野 幸一

## 詩

田村隆一・北村太郎・黒田三郎  
a chess of game

鮎川・黒田・三好・北村・田村

東京都中央区日本橋茅町2の3

### 東京書店

# FOU

No. 16

## 評論

愚劣な存在……岡田 芳彦  
抒情というもの……藤田 三郎

## 詩

濱田耕作・中島 宏・寺島春子・  
森 菊藏・野口 平・藤吉正孝・  
鳥山邦彦・岡田孝彦・兒玉 惇

## 小説

ここを過ぎて……峰 俊一

## 時評

詩人の時代意識・戦後文學の方法

福岡県八幡市茶屋町1丁目

### FOUクラブ

1948年6月30日印刷発行 1947年9月22日第3種郵便物認可

編集兼発行人 出海 俊也 印刷人 大牟田市小濱町25 西田 一郎

PIONNER 第3集 ¥20.00(〒2.00) 発行所 福岡県三池郡波瀬 ピオネ社

## 編集後記

・本集は艸岬から編集をやつてもらつた。特集として座談會と合作詩をおさめた。

・ぼくらの季節帯に低迷している思想的倦怠はすべてのものを灰色に染色せしめている。

Pionner はそれに対する抵抗の座であることはすでに第1集に書いたが、ここではもはや「美」などというものを第一義として求めるアルチザンの精神は完全に否定される。詩でさえもがそうである如く——。モラル、宗教、政治はぼくらを強いている。

・彼らは地底を探索している。ぼくらは地上に飛躍をつづける。同一の抵抗の座より——

・科學においても近來原子の實體把握にむかつて集團的知性の結集が要求されている。詩作プロセスにおいて、ギルド的なものを墨守しているこの國の詩人に、ぼくらの合作の試は大なる示唆を與えるであらう。もちろん、ここにおさめた四篇の作品が完全なものなどとはいうまい。合作詩における思想性の問題は大きな壁となつて、ぼくらに次の飛躍をうながすだろう。ともあれアルチザンとしてのジャンル意識の破壊に、ぼくらの共同製作を魁として、アンチテーゼを提出するだろう。

・來る十月より「ピオネ」は「FOU」と合併する。詩と小説と評論を中心とする文藝雑誌として新しき飛躍を遂ぐべく目下鋭意準備中であることをつけ加えておく。

Kei Izumi

・原稿送附先  
横濱市神奈川區六角橋36 川島方 出海俊也宛  
・注文送金などは一切發行所へ

④

# 荒地 1947年

8月號 第1輯

## 作品

勾配(他一篇) 森川 義信  
囚人(他一篇) 三好豊一郎

## 評論

詩と知識人 西村 孝次  
——T・S・エリオットについて

10%

non figuratif の藝術 北園 克徳  
詩とモラルテ 齋藤 正直  
暗い構圖 鮎川 信夫

定價 ¥10

★

9月號 第2輯

## 豫告

## 作品

黒い歌 楠田 一郎  
時代の囚人 黒田 三郎

## 評論

危険人物 安藤 一郎  
Lost Generation の告白 中桐 雅夫  
楠田一郎論 岡田 芳彦

10%

囚人に關するノート 鮎川 信夫

昭和二十一年七月三十一日(第三種郵便物認可) 昭和二十二年七月二十日印刷總本 昭和二十二年八月一日發行

八月號

定價 二十圓

③

# 現代詩叢書

第一輯

本叢書本文部省出版局委託(行)刊

あまい唄さ  
堀口 大壁

哀とさびの嵐  
若谷 健司

秋風への回想  
城 左門

信濃の花嫁  
武田 武彦

春 愁  
田中 冬二

水の補脚  
丸山 薫

遍歴の手紙  
秋谷 豊

幻燈畫  
岩佐 東一郎

海の抒情  
白井 喜之介

道しるべ  
菱山 修三

發行所 岩波書店

東京都中央区日本橋茅町2の3